

## 巻 頭 言

### 設計図だけで受託生産してもらえる？

西川 禎一 (にしかわ よしかず)

所属：生活科学研究科 食・健康科学講座

専門分野：細菌学（食品微生物学）

趣味：野菜作り、援農活動、読書、水彩画、  
ライフル射撃、など



1999年春の本学赴任から早や16年。しかしその間に私はセンターを利用したことが無い。巻頭言を書くような大それたことに何故なったのか、と頭を抱えたが、前を向いて今後のご縁を考えてみたらネタが見えてきた。

私は食の安全確保のための研究をしているのだけれども、食材中には種々雑多な菌が紛れ込んでいて目的の病原菌を見つけ出すのは容易ではない。そこで、疎水性格子膜の利用を思いついた。5 cm四方程度の中を疎水性の線で1600に区切った濾過膜なので食品中の沢山の菌をきれいに整然と並べて培養できる。培養された菌の塊を別の格子膜に転写してレプリカを培養できれば、これを用いてDNAハイブリダイゼーションなどの手法を適用し、1600の菌塊中に潜むたった一つの病原菌塊でも効率よく識別できる。そうすれば、陽性と判定された菌塊を格子膜の原本から釣り上げて目指す菌を的確に取れることになる。ここまで構想したのは良かったが、格子膜から格子膜へと菌を正確に移植するのは大変難しい。困って調べていると同じようなことを考える人が世界には居るもので、この移植装置を作って販売しているカナダの工房をネットで見つけた。研究者を定年した人が道楽でしているような所で、社長兼従業員らしい。藁にも縋る思いで個人輸入したところ上手く作動し、英誌と米誌に各1報出せるような成果を上げ、国費留学生は無事に学位を取って母国の大学助教になれた。

この手法を使いたいという研究者も現れインドからは政府派遣の研修生も受け入れた。ところが、製造元がもう仕事をたたむと言い出した。慌てて希望者を募り纏めて6台の装置を発注、納品を待っているのだが、間違いなくこれから先の供給は無い。途方に暮れていたら巻頭言の依頼が舞い込んできて、センターを思い出した。設計図さえあれば作ってもらえるのでは（自分で作るとは言いません）、と思うことにして一安心の春を迎える。